
清火

さらさら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

清火

【Nコード】

N7396X

【作者名】

さらさら

【あらすじ】

法則を無視する魔法能力。横車を押す超身体能力。二つの能力が人々に付せられたこの世界で、たった5%だけ存在する無能力者。その無能力者の村に住むリティとクロが、変則少女を巡る騒動に巻き込まれていく物語。

ファンタジー&ファンタジーに、魔物も出します、魔法も撃ちます、凄い剣術です！ 的なお話にするつもりです。

ただの子供が二人おりました。（前書き）

展開、遅いです。が、私はこれぐらいが好きです、です。

戦闘とか書きたいですね。ファンタジーですし。多分、その内魔法も剣術も出てきますし、どーんと幼稚な感じになるかと思えます。

それでもよろしければ……もとい、良かろうが悪かろうが、ぜひ読んで下さい><
では。

ただの子供が二人おりまして。

まだ、ビルもダムもなかった時代。ある時、一人の異能者が生まれた。

一人の異能者は、十二歳の途中で自らに秘された並外れた身体能力に気付き、十四歳で魔法を使える事を発見した。そして、それが自分だけにある、異能であると理解し、誰にも知られないように一生を終えた。

彼には、双子の息子が居た。二人の息子も、彼の例に従って異能者として生まれたが、長男は魔法を持たず、次男は運動音痴だった。二人は、十九歳で別れ、二十三歳で争った。二十五歳で次男が長男を殺してしまっただが、次男もその後悔いて、自ら命を絶った。

野に落ちた彼らの死体を、野犬達が貪り食った。その野犬達の糞が、土壌へと変わり、土壌からは多くの花々が咲いた。花々は、花粉を飛ばし、各地にその勢力を伸ばした。

人間達はその花が、食用に適していると判断した。花は各地で収穫され、市場に流通した。

こうして、異能の力は徐々にその濃度を下げながら、動植物、そして人間、全てへと広がっていった。

異能の力が発露したのは、最初の異能者が生まれてから六十年が経とうとしていた頃だった。各地に増えていた野犬、野良猫、山猿の類が、一斉に凶暴化・知能化したのである。各地の小さな村は、自衛する間もなく、魔物と化した動物達の巧みな集団戦法の前に、次々と壊滅していった。また、動物達の一部は、魔法をも用いていた。

それに呼応するかのように、植物の一部も、意思を持って動くようになった。特に恐ろしい物では、急速にツタを伸ばし対象の足を取り、そのまま地中へと引き込むという植物らしからぬ動きをした。人間達はこれを畏怖して魔植と呼んだが、その後これらによって動

物達の猛威が少し収まると、一転して聖植と呼ぶようになった。

そして、五年ほどの歳月を経て、ついに人間達にも異能の力が備わり始めた。

異能の力は、先天性の物で、特に二十歳以下の未成年者に多く見られた。身体能力に異常に長けた者、魔法能力を有する者、その二つを共に得た者。気が付けば、何の能力も持たない一般人が、異端者になっていた。

異能者達は、無能力異端者を弾圧した。無能力異端者は、様々な組織を結成しては異能者達に立ち向かい、時には勝利する事もあったが、多寡による劣勢、個人の戦力による劣勢はいかんともしがたく、急速にその数を減らしていった。

しかし、異能者達の方にも異変が起こった。魔法を主とする勢力と、超身体能力を主とする勢力に分かれ、一種の内紛が始まったのである。その中で、どちらにとっても異端である両方を有する両能力者達は、居場所を失った。居場所を失った両能力者は、やむなく無能力異端者と和を結び、やがて一つとなった。

数年の間、魔法能力勢力、身体能力勢力、両能力者と無能力異端者の勢力は争いを続けたが、魔物や聖植の動きが年々活発になっていく中で、国境を引いて停戦する事を決めた。

両能力者と無能力者の国では、停戦後すぐに内紛の兆しが見え始めたが、議会を置く、という条件の下和解が成立し、紛争なく収まった。

百年が過ぎた。三つの国同士では、小さな小競り合いが五年に一度ほどの周期で起こったが、どれも大戦争へは続かず、各国の間での紛争はゼロと言って間違いなかった。

しかし、身体能力勢力の国は大規模な争乱の只中へと入りつつあった。どちらかと言えば知能的だった魔法能力者、穏便派の多かつ

た両能力者や無能力者に比べ、身体能力者は好戦的な者が比較的多く、当初から火種は見え隠れしていたのだが、二十年ほど前からそれが燃え上がり、現在の大火へと繋がっていた。各地に独立した村や町が誕生し、一種の無政府状態へと陥っていたが、不介入、無関知を貫こうとする二つの国は、重い腰を上げようとはしなかった。

そこに現れたのが、身体能力者の太祖とも呼ばれるグルーである。グルーは、小さい村の出身ながら、卓越した弓術と指揮能力の高さで、瞬く間に国の半分を統治下に落とし込んだ。残った村や現政府は連合し、彼に対抗したが、わずか三年の内に滅亡。身体能力者の政府はそれ以後、グルー政府と呼ばれるようになった。

安定を図る二国は、グルー政府に対し、お互いの不可侵を確認すると共に、国交を取り合った。

更に、百年が過ぎた。国同士の交流は更に強くなり、国境を越えて住み移る者も増えてきたこの頃になって、無能力者への差別がまた新たに起こった。既に魔法や、異常身体能力についてのノウハウを得ていた人間達の、無能力者への攻撃は激しく、多くの無能力者は、両能力者・無能力者の国の中でも、他国との交流を拒否する地域へと移り住み、難を凌いだ。

また、魔法能力者の国では、技術革新が相次いだ。特に大きい物は、技術者ミルが生み出した鉄道で、これによって国内の移動に事欠くことはなくなった。この技術を輸出し、多大な利益を得た事から、魔法能力者の国をミル国と呼ぶようになった。

グルー政府は、国名を正式にグルー帝国とし、巨大な建造物を多数作り上げた。これには、限られた土地を有効活用するという目的の他、万一ミル国などから攻め込まれた場合でも、遮蔽物によって有利に戦えるようにとの配慮が含まれていた。

だが、彼らが心配した大戦争は、結局起こらなかった。

それから十七年、時が流れた。

両能力者・無能力者の国は未だに名称がなかったが、特殊な能力者の集まりである事から特国、「とつこく」と呼ばれるようになっていた。その特国でも、特区扱いである無能力者の多く住む地域に、一人の少女が居た。

「はい、次の方。どうぞ」

彼女は、無能力特区でもかなり小さい村に住み、無宗教教会で悩み相談を受けて暮らしている。毎日、九時間。ただ座って話すだけだから、そう辛いという物でもなかったが、ただその悩みの詰まらなさと、どこか横暴な相談者の口ぶりから、若いのによく続いているものだ、と村中で言われていた。

「なんで、分数の割り算は、逆にするんじゃない」

「……それは、逆数の掛けるのに等しいからです」

「ぎゃくすつ……逆数ってなんじゃない！」

まともな教育を受けていない村人の中でも、少女はまだマシと言える部類であった。腕っ節は全くなかったので、その知識を恃んで仕方なく相談所を開いたのだった。

「では、十個のケーキを一個ずつ分けると、何人に渡せますか？」

「わしを馬鹿にしとんかい。十人じゃ」

「その通りです。では、五分の一個ずつならどうでしょう？」

「む……一個で五人に渡りよるから、五十人じゃ」

「はい、その通りです。今、十と五を掛けましたよね？」

「……つちえ！　またくるけえの！」

もう一年になるが、一部の村人は未だに教会を九時間も占拠するのはおかしい、と、雀の涙ほどの知識と知恵を振り絞って、彼女に挑戦し続けている。そしてそれは常に、今のように跳ね返されているのだった。

「はい。悩みなく、いらっしやらない事をお祈りしています」

それでも、笑顔で応対する少女。彼女の名前は、リティという。無能力者の両親の子供として、期待通り無能力者で生まれてきた彼女は、現在十六歳。本来ならば青春盛りの彼女だったが、両親の早死にもあり、既に自立して一人暮らしを営んでいた。

「……おしまいっ！」

「お疲れさま。よく続くなあ」

そんなリティの、この村唯一の同年代の少年が、今彼女に声を掛けて慰撫したクロである。二人とも村生まれ村育ちだったが、長く縁がなく、二人が親しく会話をするようになったのはここ一、二年の事だ。クロは両親共に健在で、これといってせねばならない事もない為に、時々リティの仕事を見に来ていた。

「皆、良い人だよ？　多分。いつもは。ここ以外では。……あー、腹立つ」

「徐々に仮面が剥がれてるよね」

「あたしゃサンドバックかーっ、って叫ぶのも、時間の内だね、こりゃ」

大きく伸びをしながら、リティは真後ろに立っているクロを逆向

きに見た。長い髪が、無造作に床へと広がる。

「自分で言う？」

「じゃ、クロが言ってくれる？」

「『あたしやサンドバックだーっ！』」

慌てて、リティは右手でクロの口を押さえ、残った左手の人差し指だけを立てて、声を抑えるように求めた。一瞬キョトン、としながらも、リティの意図をすぐに理解して、クロは叫ぶのを止めた。

「……今日は、巡回の日だっけ」

一転して静かな声で、クロは確認するように尋ねた。

「そうだよ。ほんと、クロってそそっかしいよね。ドジっ娘狙い？」

「多分、男の場合は要領が悪いのと、注意不足ってだけだと思うけどね」

「いやいや、中々可愛いですよ？ このリティ様が言うのだから間違いないっ！」

「リティより可愛いかな？」

「や、それはないかな。……んでんで、誰がサンドバッグだって？」

リティが詰め寄ろうと立ち上がった瞬間、教会の重く大きな扉が、見た目通りの音で軋むのが二人の耳に届いた。

人の心の、

……。どれだけの時間が経っただろうか。大きな扉は、軋むだけ軋んで、開かないままだ。

「……あれだよ、あれ。扉を開けてみたら、死体が寄りかかってたりする奴。あるよねえ」

「怖い事言っなあ。そんな肝っ玉の太いリティに、ぜひ開けてきて貰いたいんだけど」

「略したら肝いリティになるから、やだ」

と、リティはクロの後ろに立って、扉の方へとぐいぐい押しやった。クロの方も元々そのつもりだから、さしたる抵抗もせず、押されるがままになる。

「……死体が出る方に、あたしゃ今日のデザート・バナナ一本賭けるね」

「じゃ、僕は出ない方にバナナを賭けようかな」

「だーめ。それじゃオッズが成り立たないよ。……クロは、向こう一週間の牛乳って事で」

言って、反論を言わずまいリティは自ら扉を引いた。結局自分で引くのか、と苦笑しつつクロが見下げると、そこには果たして意識のない男性が口から血を垂らしながら倒れていた。

「はい、牛乳ね」

「いやいや、まだ生きてるかも知れないよ？」

クロはしゃがむと、男の口元と胸元に手を当てた。数秒間、そのまま動かないでいる。

「……どう？」

待ち切れなくなつて、リティが尋ねると、クロは胸に当てた手を大きく振り上げたのち、真っ直ぐ男の腹へと振り下ろした。

「今、死んじやったかな。さっきのは死体じゃなかったよ」
「卑怯な手を……痛み分け、ドローだね」

二人はそう笑い合い、完全に動かない男の体を外へ運び出した。そして、教会の椅子に座つて人心地付いた。

二人にとつて……と言うより、この村にとっては、このような事は日常茶飯事だった。週に一度ほど、不穏分子、危険因子が、『巡回』によつて死を賜る。

『巡回』とは、村を統治する両能力者……ダブルホルダーが、村に住む無能力者達の中から、“能力を後天的に得かけている者”を見つけ出して排除する為の物である。無能力者は普通、生まれてから能力を獲得する事はある得ないのだが、たまに、何らかの原因によつて能力に目覚める者も居る。最初はクロやリティも、知人を容赦なく、かつ突然に殺していく巡回を憎んでいたが、“能力を後天的に得た者は、精神の崩壊を来たして見境なく人を襲う”という事を知り、また、ダブルホルダー達の優しい声や顔と付き合っている内に、憎しみは姿を消し、仕方のない事なのだ、という考えへと至った。

その考えは、村中に浸透している。だから、死体が道にごろんと

転がっていても、村人はさほど気にしない。少々異臭のする腐りの早い生ゴミ、とまで考えている者まであった。

「むーん。ばななー。むむーん。ばなななー」

リテイが謎の歌を口ずさみつつ、デザート・バナナを食べるのを見ながら、クロは趣味である矢矧ぎを始めた。それほど上等な矢は作れなかったが、いびつな形であっても、自分で作った矢には思いがこもる。思いがこもった矢は、多分どんな矢よりも正確に遠くへと飛んでいくのだ。

「フロほ、飽ひなひほへ」

「一応、弓術を習ってるしね」

口からバナナを飛ばしながら話しかけて来るのを、上手く避けながら組み立てていく。元々材料の準備がしてあった事もあって、ものの十分ほどで美しい一本の矢が出来上がった。

「弓つてさ、コストパフォーマンス悪いと思うんだよね」

「お金は掛かるけど、命は掛からないからね。それでもないよ」

遠くから攻撃する分には、魔物の殆どを安全に倒す事が出来る。そんな考えと、細身のクロにとって唯一扱い得る武器であるという理由から、クロは弓矢を自分に打って付けの得物だと確信していた。上手く隠れて射れるのならば、魔法能力者とは互角に戦う事も出来るはずだ、というのがクロの自説であった。

次の矢に取り掛かるクロを見ながら、七本目のバナナにリテイが取り掛かるうとした時、今度は軋む間もない勢いで扉が押し開かれ、見知らぬ一組の男女が、およそ教会の仕来りなど気にも留めていない歩みの調子で、二人の下へと歩み寄ってきた。さすがに警戒して、

七本目のバナナを剥くのをやめたりティは、暇になった右手を懐へ入れながら、相談を受ける時にいつも座っている椅子へと、にこやかに移動した。

「営業時間外ですが、ご用件をお伺いします」

「……外の死体、あれは何だい？」

「正確には分からないため、お答えしかねます」

「死体がある事は、分かっているって事よね？」

明らかに、男女は村に馴染みがないようだった。村に三度も来ていれば、死体が一つ二つ転がっていた所で、そう不思議には思わないだろう。

「はい。多分、『巡回』による物かと思います」

「『巡回』……か。レネスさん、この村はもう……」

と、男は急にリティから顔を背け、女にこそつと一言呟いた。その為リティには全く聞こえなかったが、女の方の椅子に座っていたクロはその言葉を聞き咎め、

「“洗脳”ってどういう事ですか？」

と横槍を入れた。

「あら。聞こえたみたいね」

「……洗脳は、洗脳さ。君たちは、ひどい洗脳を受けているんだよ」「ご相談でないのなら、お帰り下さい」

リティは、二人の話をシャットアウトするように、ぴしゃりと言った。冷やかしにしても、あまりにタチが悪い。だが、男は構わず、

勝手に話し始めた。

「人の遺体を見て、何も感じない。そんなのは、この村の人だけだよ。『巡回』というのは、無能力者の覚醒を防ぐ措置の事だろう?」
「はい。後天的な覚醒は、覚醒者の心的負担が大きく、他の村人を襲う事が予期されるからです」

クロは、一度話を切り上げながらも受け答えをするリテイを見て、自分と同じ様に彼女も、男女に異質な物を感じているのだと思った。少なくとも、聞いていて、ただ貶しに来る村人とは一風違うのがよく分かる。

「君たちは、何週に何度、巡回による死体を見た?」

「……週に一度くらいです」

「この村は、小村だろう? そんなペースで村人が減ったら、今頃死に絶えているんじゃないか?」

「……………」

リテイは、言葉に詰まった。総人口は、確か二百人弱ほどだった筈だ。一年が五十二週だから、四年もあれば村は滅んでしまう。

「村人は、補充されている。一人死ねば、一人が新たに加わるといふ様にね」

「誰が、何の為に?」

堪らず、クロはまた口を挟む。しかし、男は頭を振って、

「……問題は、そこじゃない」

とクロに向き合った。

「君たちの考え方は、いわば非人道的だ。この村も、もう長くはない。逃れたいと思うのなら、僕たちに付いてくるべきだろう」

話が急だ。それに、今日会ったばかりの男に非人道的と言われる筋合いもない。クロは男を無視して教会の奥へと引っ込もうとしたが、彼とは反対に男を歓迎しかけているリティの様子に気付いて、足を止めた。

「ね、クロ。私は行くよ？」

「……そう。僕は行かない」

少しの衝撃が、クロに走った。が、すぐに教会の奥へと足を向け、その場を歩き去った。リティは、それも気に留めずに、七本目のバナナに手を付ける。

さすがに訝しく思っ、男が訊く。

「彼、構わないのかい？」

「何がですか？」

「幼馴染なんだろう？」

「たった二年ほどの付き合いです。訣別という程の物でも、ありません」

男は、目を細めた。さっき自分で言ったばかりだったが、この少女と、自分達とは、決定的に何かが違うと感じたからである。淡泊で、無味乾燥な感傷。そう聞き及んでいたのが、そのまま目の前に現れたようだった。

「……じゃあ、レネスさん。とりあえず、出ましょうか」

「そうねえ。自己紹介は、それからね」

くすくす、と笑う女に、男は更に眉をしかめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7396x/>

清火

2011年11月11日19時29分発行